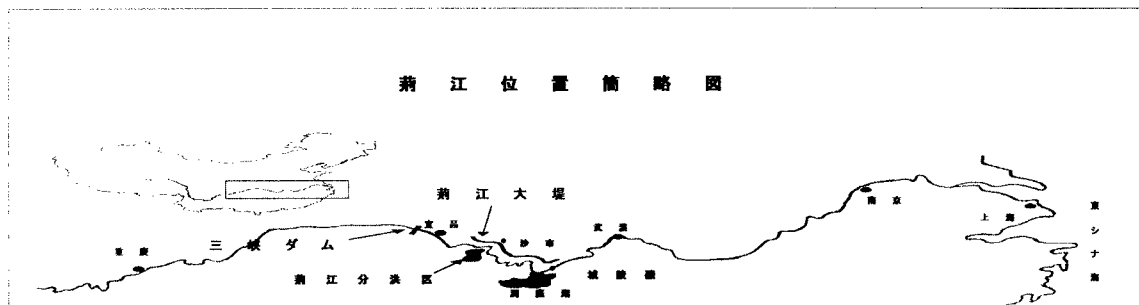


関東学院大学  
関東学院大学

手続中 池田 昌平  
フェロー 宮村 忠



## 1 はじめに

長江には、川江・峽江・荊江と称される区間がある。このうち荊江（湖北省枝城から湖南省城陵磯の約 400 km）は、長江の治水にとって最も重要な部分と評されている。ここでは、この荊江評価の要因を河川変遷史を通じて追求した。

## 2、荊江區間の位置と地理

荊江區間は長江中流部（湖北省宜昌～江西省湖口までの約 1,000km）に位置、勾配は非常に小さい。宜昌から長江河口までの平均勾配は 0.024% で、1km あたりの高低差は僅かに 2.4cm である。

宜昌から宜都を経て枝城に至り、ここで長江の沖積地である江漢平原に流れ出し、激しい蛇行を繰り返して東南に流れ、湖南省城陵磯で洞庭湖の水と合流する。

この枝城～城陵磯までの長さ約 400km の部分が荊江區間と呼ばれ、長江の治水対策上で最も重要といわれる区間である。荊江大堤、洞庭湖、荊江分洪区などどれも荊江區間と深い関係がある。

城陵磯で洞庭湖からの水と合流すると、分流しながら東北に流れ武漢市に至る。武漢市で左岸側から漢水が合流する。

また、荊江區間の近年の気温は一月平均気温 4～8℃、七月平均気温 32℃以上である。降水量は一月 25～50 mm/月、七月 150～200 mm/月である。この気象条件と肥沃な土地によって洞庭平原・江漢平原（荊江の北側）では、米・綿花・アブラナ等が栽培されている。この地区は湖北省の代表的農業地区である。

また、荊江區間で起こる洪水の約 5 割は宜昌より上流の集中豪雨の影響を受けている。

### 3.1、武漢市の史的評価

漢水が長江と合流したところに、湖北省の省都である武漢市がある、長江と漢水の合流により水運の便に恵まれ南北水陸交通の中心に位置する。しかし、武漢市は。

漢代から商業が繁榮し、唐・宋代にはさらに発展した。宋代には、漢口（現在は武漢の漢口鎮）・河南の朱仙鎮・江西の景德鎮・広東の仏山鎮とともに「四大鎮」と称された。

### 3.2、現在の武漢

漢口・武昌・漢陽の武漢三鎮から成る武漢市は、湖北省の省都である。そして華中地区の政治、経済、化学、文化の中心であり、中国内陸部で最大級の工業都市である。

武漢市は中国大陸の中央部に位置し、中部地区の水・陸・空の交通の中心であり、長江中流部の大都市である。武漢市は鉄鋼、機械、紡績が三大産業となっている。製鉄所は中国最大クラスである。

キーワード：長江・荊江・治水

〒243-0122 神奈川県厚木市森の里 3-14-1 046(247)9372

### 3.3 武漢の諸元

面積 8467 k m<sup>2</sup>、耕地面積 228 千 ha、総人口約 700 万人、非農業人口約 395 万人、人口密度 822 人/k m<sup>2</sup>、

### 4、雲夢沢

昔、江漢平原は巨大な湖であった。秦漢時代の長江左岸には雲夢沢、右岸には(洞庭湖のもととなる)湖沼群があり長江の水が溢れても被害は少なかった。しかし、雲夢沢が土砂の堆積や地域開発により埋め立てられると、対岸の湖沼群に水が流れ、洞庭湖ができてくる。しかし、今日では、その洞庭湖も灌漑や流入土砂により埋め立てられてきている。

### 5、荊江堤防

荊江大堤(堤防は両岸にあるが北岸は荊江大堤と呼ばれ、南岸より高い)は西の江陵県棗林崗から東の監利県城南まで全長 180 km 以上ある。荊江堤防は東晋時代に築かれ、宋代にやや拡張され、明代になって連続堤防となった。この堤防は江漢平原に住む人々の生命と農田を守るばかりでなく、重要な都市である武漢市と南北交通の要、京広線(北京～広州)の安全を確保するためである。

新中国政府は荊江堤防を洪水防御の最重点施設として、その維持管理に力を注いだ。

現在の堤防の高さは、1954 年の沙市での最高水位より 1m 以上高くしてあり、堤防の幅は 8～11m に広められた(一番広い所では 30m に達する)。改修の時にはモグラや白蟻の退治を行い、堤防崩壊の危険を取り除き、堤防の基礎を固め、護岸、河川敷にも様々な対策を立てた。様々な改修工事により堤防は強化され、洪水に対する抵抗能力は高められた。

また、このとき、堤防の補強方法に新たな発展があった。明朝時代から、荊江の水害対策は“南を棄て北から救う”の方針がとられていた。そのため、南岸は何回も決壊した。そのため南岸の地面は堆積砂で高くなり、荊江区間の南岸は北岸より高くなった。そのため荊江大堤はより多くの洪水の圧力を受けた。しかし、現在では常に荊江大堤の方が高いように補強されている。しかし、このことは河床を高くしてしまい天井川にする要因となっている。また、荊江堤防の両側には水害防備林が配備され、堤防の上は平らに整備されて堤内地の安全を守っている。

### 6、荊江分洪区

荊江区間における人口増加、そのため洪水時の被害拡大が予想されるようになった。そこで安全性を高める必要性がでてきたため、1952 年に荊江大堤を補助する目的で荊江右岸の湖北省公安県内に面積 920km<sup>2</sup>、約 54 億 m<sup>3</sup> の洪水を貯水することのできる分洪区をつくった。

太平口分水門から分水し(54 孔、長さ 1055m)、黄山頭の調節水門(32 孔、長さ 336m)から排水する。

この分洪区を築造するにあたり、この地区に居住していた人々の移転があった。この地区に残る人々は分洪区内に安全台と呼ばれる周囲より高台になったところへ移転した。

分洪区内は洪水時には、その目的を果たすために浸水する。そのため、分洪区内の建物に関してある程度の規則があることが現地のヒアリングによりわかった。

それは「三階建て以上の建物は建ててはいけない・工場は建ててはいけない」といったものである。

これは分洪時に被害を最小限ためである。しかし、分洪区内で農業経営はされていて、農地面積は約 3 万 6 千 ha で約 40 万人が住んでいる。この人たちの安全を守ることが分洪区の問題となっている。

### 7、おわりに

治水対策を考える時、全てを無傷で済ますことは難しい。治水は総合的に考えるため、安全性にかかわる優先順位が存在することとなる。

「(長江本流の)洪水から武漢を守る」、目的のため荊江区間は重要な河川区間となっている。

### 参考文献

- 1) 「水害」 宮村忠：中公新書 (1985)
- 2) 「長江」 小出博：築地書館 (1987)
- 3) 「中国史稿地図集」 郭沫若：、地図出版社出版 (1979)